

# 特集

町をあげての誘致活動実る

## ”灯台遺産“ 神威岬灯台 第一等不動レンズが帰郷

＝ 日本に1基現存 ＝

町内産業経済団体がその力を結集して取り組んだ「神威岬灯台第一等不動レンズ」里帰り構想。令和元年から3年間に及ぶ構想実現活動が実を結び、かつて「魔の海」と呼ばれた海上交通の難所を照らし続けた灯台レンズが約60年ぶりに神威岬に帰ってきました。町の新たな観光資源、そして灯台守の苦難と地域との絆の歴史を現在に繋ぐ歴史的資源として実現した灯台レンズ里帰りの歩みを振り返ります。



力を合わせて夢を実現

### 町地域活性化協議会

灯台レンズ里帰りの実現には、積丹町地域活性化協議会(代表・杉山寛樹)積丹観光振興公社社長・構成・産業経済等8団体及び町の異業種の垣根を越えた活動の努力がありました。令和元年5月の総会で、小樽海上保安部から神威岬でかつて使用されていた第一等不動レンズの存在と、当時展示されていた大阪の鉄道会社運営の「みさき公園」が閉鎖により、同レンズ所有者の(公社)燈光会(東京都)が今後の用途と保管場所の検討を行っている情報が寄せられました。

協議会では同11月に燈光会を訪問し、灯台レンズ里帰りの要望書を提出。また灯台を所管す

る国土交通省海上保安庁(東京都)を訪問し里帰り活動への支援を要請しました。

こうした活動が実り、令和3年4月には積丹町が燈光会と灯台レンズ無償貸借協定書を締結。同7月には大阪からの一時保管場所(犬吠埼灯台・千葉県銚子市)からトラック輸送により、神威岬自然公園内の「カムイ番屋」2階に搬送。令和4年3月には同レンズの組立・設置が完了し、約60年ぶりの里帰りの夢が果たされました。

134年の記念日に里帰りを祝う記念式典

神威岬灯台初点灯の日から134年目を迎えた去る8月25日には、灯台レンズの里帰りを祝う記念式典が挙行され、町議会議員のほか、岩崎第一管区海上保安本部長、萩中小樽海上保安部長、石田燈光会専務理事らが来町され、貴重な灯台資源の新たな門出を祝いました。

また、当日は翌日の一般公開に先立ち、灯台守の苦難の歴史を伝える新たな展示施設の内覧のほか、同式典に合わせ神威岬灯台を題材とした町内小中学生



▲高杉海上保安庁交通部長(右奥)へ要望(R1.11月13日)



▲萩中小樽海上保安部長から杉山代表へ感謝状贈呈(8月25日)

# 特集“灯台遺産”

## 神威岬灯台第一等不動レンズが帰郷

の絵画コンクールや、小樽海上保安部による神威岬灯台展望塔の一般公開が行われました。

### 全国で積丹にひとつだけ

#### 第一等不動レンズとは

国内に唯一現存する「第一等不動レンズ」はフランスのソーター・ハーレー社製のフレネル式・六面構成レンズで、フランスより明治9年（1876年）頃に輸入され宮城県きんかさんの金華山灯台で使用された後、大正12年（1923年）から37年間、神威岬灯台の二代目レンズとして約43km先までの神威岬沖を照



▲カムイ番屋2階の展示スペース（一部）

らし続けたもので、高さ約3m、直径約1.8mとレンズの等級（※）の中で最大です。

#### ※レンズの等級

レンズの焦点距離の長さにより「第一等」から順番に「第六等」、第六等よりも小さい「等外」までの7等級があり、灯台の重要度や必要な光達距離によって設置するレンズの等級が決められています。

灯台レンズの組み立ては、現在国内で唯一とされる株太洋機械製作所（横浜市）の熟練の技術者たち3人が3日間を費やす大作業で、ガラス製レンズの性質上、作業中にボルト一本落下させることの出来ない極めて慎重な作業が求められました。

灯台レンズは、町の第三セクターで協議会構成員の榎ペンシユラの管理下で式典翌日の8月26日から一般公開されています。

### 灯台守と余別村住民の絆 苦難の歴史を伝える

#### ■「断崖絶壁」の暮らしと

##### 悲しい事故

展示施設は、厳しい岬の先端、文字通り「陸の孤島」で灯台の

光を守り続けた「灯台守」達の苦難の歴史を現在に伝えます。

昭和35年（1960年）に神

威岬灯台が無人工化されるまで、あの断崖絶壁の官舎で生活していた灯台守とその家族は、現在のような遊歩道が整備されていない馬の背のような尾根を歩いて海岸へ降り、波待ちをしながら岩場を伝って余別村へ買い出しに向かう厳しい条件下で生活していました。

大正元年（1912年）10月、灯台守の草薙灯台長夫人と1歳の長男を連れた土屋補助員の夫人の3人で余別村へ買い出しのために岩場伝いに歩いていたら、ワクシリ岬で突然の荒波に襲われ亡くなる事故が発生。このことに心を痛めた余別村の村民たちが海難事故を悼んでトンネルの掘削を決意。しかし、当時の測量・開削技術の未熟さから岬の両側から掘り進む際にずれが生じてしまい、一時工事を中断したものの、殉難者たちへの供養を込めた念仏を唱えて鐘を打ち鳴らしたところ、掘り進む方向が分かり、大正7年遂に「念仏トンネル」が開通に至っ

たという歴史が残っています。

半島最先端の厳しい環境下にありながらも、他者への思いやりを大切にしている村民の姿は現在の閉塞感漂う社会情勢下に暮らす私たちにとっても学ぶべき事実です。

私たちはこの灯台レンズの帰郷を単なる観光資源としてではなく、灯台守と余別村住民の絆を伝える歴史文化資源の一つとして後世に伝えていく役割を担っています。

灯台守が暮らしていたかつての神威岬灯台の事務所・住宅





# 特集“灯台遺産”

## 神威岬灯台第一等不動レンズが帰郷

■110年の歳月を経て新たな事実も

灯台レンズ展示室の完成が近づくと今年5月のある日、土屋補助員夫人の道外のご親族から遠い昔神威岬の灯台守だった祖先のルーツを辿る熱い思いを込めた情報が役場商工観光課に寄せられました。土屋補助員夫人の子が二男ではなく長男で、事故時は3歳ではなく1歳であったという新たな事実でした。

当時の年齢が数え年であったことや、海難事故により1年後に死亡が確定されたことによるものと考えられます。大正元年10月29日、その日は天皇誕生日の祝品を買うために余別村に向かったと伝えられており、当時の時代背景の中で国の職員の仕事を支える家族の一員が、危険な天候・海況を承知の上で1歳の赤ん坊を背負って出かけざるを得なかったと推察すると胸が詰まります。

まもなく迎える令和4年10月29日は、その悲惨な灯台守の海難事故の日からちょうど110年目の命日となり、不思議な歴史の縁を感じます。

新たな使命を担う

積丹町の誇る「神威岬」

神威岬自然公園は、平成29年「恋する灯台」の認定、平成30年政府の「観光を通じたインフラの活用」の重点公的登録施設の一つ（全国3箇所）として認定された神威岬灯台を有し、観光資源としての更なる期待が高まっていますが、今回、貴重な「灯台遺産」の一つが新たに加わりました。

年間約30万人が訪れるこの自然公園にとって、「第一等不動レンズ」は積丹町の歴史を伝える新しい「使命」を担うことになり、それは同時に積丹町にとって新たな活躍の舞台を得たということにもなります。

町民の想いを一つにして実現したまちづくり活動の歴史的価値と、積丹町が誇る岬の景観をいつまでも大切に、後世に繋いでいきましょう。

## 2社から里帰りを祝う支援

### ① 椅子を製作

日本たばこ産業(株)【JT】

株式会社ペニンシユラは、第一等不動レンズの一般公開に合わせて、JTの森積丹のシラカバ材で椅子7脚を製作配置しました。

手作りでの温かみのある椅子は、JTと積丹町の『ほっかいどう企業の森林づくりに関する協定』活動事業として同社の支援により製作されました。

### ② 記念切手を製作

日本郵便(株)

灯台レンズ里帰りを記念した記念切手が日本郵便株式会社の協力のもとで製作・販売され、8月30日に渡辺 和幸朝里郵便局長が同社を代表して松井町長へ記念切手シートを贈りました。記念切手は、道内主要郵便局のほか町内の郵便局とカムイ番屋でも販売されています。

